学生によるシナリオ作成に基づくシミュレーションの導入

山口初代（老年保健看護演習/実習Ⅱ）

教育上の課題と工夫

認知症高齢者への看護は極めて個別的であり、対象の地域文化も含め、言葉や言葉として表現されない表情や姿勢等からそのニーズとストレングスを捉えケアに生かすことが求められる。

しかし、COVID-19 の影響により 2020 年度は老年保健看護実習Ⅱ（10 日間）の臨地実習が困難となった。2021 年度は実習施設の理解と協力を得て、5 日間の臨地実習をすることができたが、その 5 日間以外は学内実習を強いられることになった。学生が「認知症高齢者の健康問題をその家族を含めて総合的に理解し、高齢者の尊厳を支えるための具体的な看護実践ができる能力と自己をふり返り課題を見いだす能力を習得する」レベルまで到達するために必要な臨地実習時間の代替として、学生によるシナリオ作成に基づくシミュレーション（以下、シミュレーション）を学内実習に導入した。その内容を示す。

１）認知症を持ち、生活の場で家族と暮らしながら、ケアを受けつつ治療や療養生活をしている高齢者の実際の映像（50 分）と紙面情報を情報源とし、学生はアセスメント・目標・計画立案を行う。
２）グループワークで、各グループで設定した目標を達成するための看護実践場面について自作のシナリオを作成する。シナリオには、場面の構成や人物（学生役、認知症高齢役、家族役）の動き・セリフの他に、看護実践（学生の動き・セリフ）の意図とそれに対する反応の予測を根拠に基づき書き込む。
３）シナリオに沿って学生が学生役、認知症高齢者役、家族役にわかれて看護実践を実演するシミュレーションの発表会を設ける。その後、学生同士でディスカッション、教員からの助言をもらい、シナリオの改善点を再検討し、精錬化する。助言の視点は、映像における登場人物の対象像をふまえ、個別的な看護実践といえるのか、特に登場人物の反応としての言動が映像の立ち振る舞いを根拠に作成されているかである。
４）精錬化したシナリオに基づき再度シミュレーションの発表会を実施する。工夫を凝らした点や改善点を学生、教員からフィードバックする。

シナリオは、知識提供すれば行動変容するという支援者に都合のよいものもあれば、対象の生活がより良い方向にむかう道筋がみられない目標が漠然としているものもあるが、学生の伸びしろや柔軟な発想には教員の学びも多い。シミュレーションを通じて、学生はもちろん指導する教員にも学生の思考過程が視覚的に確認できるため、指導の指針となりえると考える。

コロナ禍の教育活動を振り返って

学生と認知症高齢者、家族が相互に関わり合う関係をとおして、対象や自身の変化を学ぶことは臨地実習でしか学べない。しかし、コロナ禍の教育活動として、臨地実習の代替として学内実習に導入したシミュレーションは、新たな教材として活用できることを確認し、after コロナの演習に導入した。振り返ると、コロナ禍前の演習ではアセスメント・目標・計画立案を通して記録の書き方に気を取られがちであったが、シミュレーションを演習に導入することで実践的な対象理解に力点を置くことが可能になったと考える。

このように、学生が、認知症高齢者、家族に関心を寄せ、その生活がより良い方向に向かうよう変化を期待し、そのための道筋をたてる自身の思考を研ぎ澄ます取り組みとしてシミュレーションを活用している。